

木工研究会 漆講習会「木を彫る、漆を塗る」

開催日時：2019年9月14日（土）13時～17時

会場：松本市 長野県工業技術総合センター 会議室

講師：北原進（塩尻市平沢在住）松崎融（栃木県茂木町在住）

参加者 23名 木工会会員 6名、一般 17名

報告者 谷進一郎

前半は北原さんのお話しと実演でした。

まず自己紹介されてから、ロクロや刳物、指物などの木地作業から上塗りまで一貫して作られた厨子や器など作品3点の他に、木地の工程がわかる様な制作見本や電動工具の作業に使う独自の治具などを色々と持参していただき、それぞれの技術的な解説をしていただきました。

普段作っているものは器が多いですが、大きなものはテーブルの様な家具から、小さなものは箸置きまで作っています。

長い間、木漆作家だった父と一緒に仕事をしてきて、色々と教えられたこと、特に教えてもらえずに見て覚えたこと、そして父が亡くなって、残された作品や道具などを見たり使ったりして経験を重ねてきました。

今の自分の仕事を見ると色々できる様になってきていますが、まだ物足りないところもあってこれからも精進していきたいと思っています。

現在は国展に会員として作品を出品していますが、作品制作では毎年自分の持てるものを注いだ代表作を作る、という気持ちで取り組んでいます。

木地制作や漆塗りの工程の要所要所では伝統的に使われてきた技法にこだわって、手道具による仕上げの良さなどは大切にしています。

その一方で、粗彫りや塗りの工程の研ぎなどでは、新しい道具や素材なども積極的に取り入れていくことで、独自の造形の制作やスピードアップに生かしていきたいと思っています。

例えば器の木地制作では、粗彫り7割、仕上げ3割、という感じなので、粗彫りが効率良くできるメリットは大きいと思います。

北原さんは木を使って形を作り、漆で仕上げることの難しさもあるし、面白さもある、ということで、苦心して思い通りに出来上がった時の達成感は、どのモノづくりにも共通していると感じました。

その後は、持参していただいた漆や道具を使って漆塗りの作業を実演していただきました。

漆の上塗りでは極力埃が付くことを避ける様にしますが、まずは父から受け継いだ

道具を使って漆を漉して絞って、ゴミや埃を取り除く作業をお見せします。
塗った面に付いてしまった埃は「孔雀の羽」を使って取り除いています。
使い終わった漆刷毛は固まらない様にサラダ油に浸してから保管してあるので、使う時には余分な油を押し出して塗る準備をしておきます。
中塗りまでできている見本の椀ですが、持ちやすい様に「ジク棒」（ツク棒とも呼ばれる）に硬質のホットメルトで固定してから、上塗りをやってみます。
ホットメルトは柔らかくなる温度が違うタイプが色々ありますが、硬めなものを選んで使っていて、塗り終わって外す時には、棒を叩いて衝撃で外しています。

北原さんには、熟練した刷毛さばきを見せていただきながら、参加者からの様々な質問にも詳しく解説していただきました。

後半は栃木県茂木町在住で木漆作家として活動をしている松崎融さんのお話しですが、器を中心に 15 点ほどの作品とノミやカンナなどの手道具を持参して見せていただきました。

私は北原さんの様に家業の二代目とか、どこかでしっかり修業をしたとかいう事もなくて、弟が陶芸作家として独立したことなどの影響で、30 歳になる少し前の頃に工芸としての木工をやってみたいと考えて、まず板をくり抜いた額縁を作り始めてみました。そして、根来塗りの使い込まれて良くなって残っている魅力に惹かれて、自分でもそういう物を作り始めました。

漆の塗り方は最初に木地固めに漆を染み込ませてから、北原さんの薄く塗り重ねる方法と違って、厚めに塗り重ねていき、それが縮むことも構わない様な、大胆な手法になっていました。

その頃の漆器は綺麗な塗りや加飾された物がもてはやされていて、焼締の陶器の様にデコボコしている様な作品は評判が良くなかったです。

そして、最初はただ手に入る木を使っていましたが、作ったものを見た人に勧められて岐阜の櫻井銘木店へ行ってから、木のことを色々教えてもらい、「性の良い」木を使える様になりました。

素材としての木はどうしても動くものですが、それを抑えるには「性の良い」動きにくい木を沢山買って寝かせておいて、それを粗彫りしてまた寝かせて、仕上げに漆を沢山使うことで、動きを少なくすることができると思っています。

器の加工などで、ハンドルーターを使うことがありますが、それは、器の中の底の平面を出す時に使うだけで、粗彫りなどは必ずノミを使っています。

というのも、ノミやカンナなどの手道具を使うとその木のことわかるが、ルーターでやってしまうと、良くわからないと思っているからです。

特注のルータービットは器の底に届く様に長さが 30 cm あります。

手道具はまとめて注文して、使いやすい様に色々加工して使っています。

漆の扱いは少し人に教えてもらったものの、ほとんど自己流で試行錯誤しながら経験を重ねてきて、今は、朱塗りや拭き漆には国産を、その他は中国産の漆を使い分けていますが、1年間に国産は7~8キロ、中国産は40キロ位使っているでしょうか。

朱漆では油の入っている朱合漆ではなく、入っていない木地呂漆と朱を合わせて使いますが、人より朱の割合が多い事で弱くなるので、拭き漆で補っています。

できたものは料理屋などで毎日の様に使ってもらって、それで塗り直しで返ってこなければ、普通の家庭ではまず問題ないと思っています。

漆はとても強いので、仕上がった状態は70から80で、人に使われる事で100になる様に考えて作っています。

耐水ペーパーの砥ぎについて、北原さんは下砥ぎで400番と話していましたが、私は上砥ぎが400番か600番で、物によってもっと細かい番手でも研いでいます。

北原さんは、最後は1500番で研いで、拭き漆すると、研ぎ目が見えない、という事でした。

若い頃は自分の中から形が湧き出してこないことに悩んで、沢山の本を集めて見たりしていて、今でも陶器や彫刻など様々な造形から刺激を受けていますが、国展に出品してそこで作家として育てられたと思っています。

それ以来、国展をやっている国画会に所属して活動していますが、若い人などに国展に出品することのメリットを聞かれることもあるけれど、出品して例え受賞してもそんなにすぐに売れるものではないです。

しかし、色々な出会いもあって、確実に世界は広がる、と思っています。

そして、私の様に70歳を過ぎて、毎年出品していると、図録にも残って、自分の存在の証明にもなる様に思っています。

今まで物作りをしてくる中で、色々な人と出会い、展覧会などで様々なものを見てきたが、いつも自分はどんなものを作ろうか、頭をフル回転させてやってきました。

自分が作ったものが、どんな所で、どんなものと一緒に使われるのか、とあって建築や他の工芸も意識して見てきました。

自分が工芸をやって行こうと思えば、木工の同業者よりも、陶芸家とか材木屋とか、と付き合いしていく方が刺激になると思っています。

刺激を受けながら常に自分はどんなものを作ろうか、と考えて、絶対にこういうものを作りたいと考えていると、技術や道具が後からついてくる様にも感じています。

自分らしい形と技術を作ることが、大切だと思っています。

工房は機械場と材木置き場、それに3間の7間の作業場があって息子と二人でやっています。

漆の仕事場もありますが、自分は性格的にあまり細かなことや片付けることが苦手で、

北原さんの様には埃を気にしたりしてないです。

70cm×4m・といった大きなテーブル板などに漆を塗る時は体重が2キロ減ってしまうほどで、汗が落ちたりしながら、スポーツ感覚でやっていることもあります。

漆は縄文時代の昔から使われていますが、漆に求められていることや作品への評価も歴史的に変わってきていると思っています。

自分の作るものは工芸品として使われるので、まずそれに耐えられるものを作ろうと彫りと漆塗りを40工程も重ねているわけです。

とはいえ、漆を塗ってみようと思う時に、漆を塗れば高く売れそうだと、とかグレードが上がる、と考えるのはダメだと思います。

形の悪いものにいくら漆を塗っても、良くはならないですから。

漆の講習会ではありましたが、お二人には器のこと、木のこと、道具や機械のこと、展覧会や売り方のこと、作家としての仕事に取り組む姿勢まで、多岐にわたり、熱心にお話していただきました。

漆の仕事は高度で奥の深いものですが、お二人それぞれ違ったスタイルで極めて活躍している作家ですので、これまでに漆を使っている参加者は勿論、漆未経験の参加者にも、参考になることの多い、充実した内容になっていたと思いました。

漆講習会 「木を彫る、漆を塗る」



北原さんの作品解説



北原さんの塗りの実演



松崎さんの作品解説